

「ミクロネシア諸島自然体験交流」

1 趣 旨

ミクロネシア諸島（以下ミクロネシアという）の子供たちを日本に招聘し、異文化交流を通して、グローバル社会に対応した国際感覚を備えた青少年を育成する。日本での文化体験、共存することの大切さを学ぶとともに、日本とミクロネシアの子供たちが友情を育むことを目指す。

2 事業の概要

- (1) 期 日 平成30年 6月10日（日）（事前学習：ホストファミリー説明会及び英会話教室）
平成30年 6月21日（木）～ 25日（月）【4泊5日】（三瓶プログラム）
平成30年 6月23日（土）～ 24日（日）【1泊2日】（ホームステイ期間）
平成30年 6月17日（日）～ 26日（火）【9泊10日】（日本滞在全日程）
平成30年 7月 1日（日）（事後学習：お手紙を書こう）
平成30年 9月20日（木）（事後学習：窯出し）
- (2) 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構（地域プログラム担当：国立三瓶青少年交流の家）
- (3) 共 催 大田市, 大田市教育委員会
- (4) 協 力 **Goodwill English Guide in Izumo GoEn**
大田市立第三中学校, NPO 法人緑と水の連絡会議
- (5) 対 象 11～15歳までの青少年24名, 随行者4名 計28名
○ミクロネシア連邦・ポンペイ州・・・青少年12名, 随行者2名
○パラオ共和国・・・・・・・・・・青少年12名, 随行者2名
ホストファミリー12家族

3 事業の内容

- (1) プログラムデザインと企画のポイント
- ア) 出雲大社見学の際、英語でのガイドを取り入れた。日本の神話（文化）を知り、より日本のことを理解できるようにした。
- イ) 事業前には「事前説明会」、「英会話教室」、事後には「お手紙を書こう」を開催し、ホストファミリーとの連携を深めることで、ホストファミリーとミクロネシアの子供たちの交流が促進されるよう心掛けた。
- ウ) ホームステイプログラムに入る前の段階で、ホストファミリーの子供とミクロネシアの子供が仲良くなるように、22日（金）の夜にレクリエーション等を行い、一緒に宿泊をした。
- エ) 24日（日）フェアウェルパーティーで島根県の伝統芸能「石見神楽」（演目は「八岐大蛇」）を紹介し、地元の神楽団に演じていただいた。22日（金）の出雲大社の見学時に聞いた神話の説明と神楽がつながるよう、事前に演目の説明を加えた。また、公演後、「石見神楽」で使う道具等に触れる機会を設けた。
- オ) ミクロネシアの子供たちが慣れない日本での活動を行うことで、急なプログラムの変更が必要となる場合も想定して、全日程において、時間に余裕を持たせて企画を行った。

(2) 運営のポイント

- ア) 施設の使い方や交流活動をする際、なるべく言語での説明だけでなく、視覚でも理解できるように準備を行った。
- イ) 緊急時、迅速な対応が行えるよう、プログラム実施時は2名以上の職員が対応できるようにした。
- ウ) 交流期間中は、全所体制で対応した。会場の飾りつけ等の準備は、担当外の職員で対応できるように行った。

(3) 広報のポイント

- ア) ホストファミリーの募集については、大田市及び大田市教育委員会と共催の形式をとることで積極的に情報発信を行った。
- イ) ホストファミリー募集については、過去の事業参加者に電話及び説明会用の資料を送付した。
- ウ) 学校訪問先の選定については、大田市校長会の場において、次長は協力要請を行った。

(4) 活動内容

○事前学習：ホストファミリー説明会及び英会話教室（6月10日（日））

10家族 27名が参加。（残りの2家族は、後日個別に対応（説明のみ））

英会話教室については、大田市教育委員会 ALT3名を講師として実施。

ア) 説明会

受け入れに当たっての注意事項等の説明を実施。

イ) 英会話教室

日常で使える英語のフレーズを、ALTが行う劇を通じて学ぶ。そして、グループに分かれて、実際に英語を使って会話の練習を行う。

○三瓶プログラム（6月21日（木）～25日（月））

<6月21日（木）>

○ねらい

- ・出雲大社の見学を通して日本の神話（文化）を知り、日本のことを理解すること
- ・交流の家の過ごし方を理解すること

☆活動内容

午後：出雲空港→出雲大社見学→交流の家へ

夜：ウェルカム交流会



<6月22日(金)>

○ねらい

- ・日本の中学生との交流を通して、友情を育むこと
- ・日本の文化体験を通して日本のことを理解すること
- ・ホストファミリーの子供たちとの生活を通して、友情を育むこと

午前～午後：大田市立第三中学校プログラム（窯芸体験，茶道体験）

午後：荷物の準備，自由時間

夜：事前交流会（ホストファミリーの子供たちとの交流）



<6月23日(土)>

○ねらい

- ・レクリエーションや野外炊飯，ホームステイプログラムを通じてホストファミリーとの友情を育むこと
- ・日本の文化・生活体験を通して日本のことを理解すること

午前～午後：対面式，野外炊飯（ホストファミリーと一緒に）

午後：ホームステイプログラム



<6月24日(日)>

○ねらい

- ・ホームステイプログラムを通じてホストファミリーとの友情を育むこと
- ・日本の文化・生活体験を通して日本のことを理解すること

午前～午後：ホームステイプログラム
夜：フェアウェルパーティー



<6月25日(月)>

○ねらい

- ・日本の買い物体験を通して日本のことを理解すること

午前：買い物体験→東京へ出発



○事後学習：お手紙を書こう（7月1日(日)）

6家族 20名が参加。大田市教育委員会 ALT1名及びボランティア2名が講師として実施。

：窯出し（9月20日）大田第三中学校全校生徒が実施。



4 参加者へのアンケート結果

(1) アンケートの集計

10 (名)

(2) 参加者の声

	とても 思う	思う	少し 思う	あまり 思わない	思わない	全く 思わない
世界に貢献したい	3	4	3	0	0	0
自分の可能性を広げたい	3	4	3	0	0	0
交流した方と将来も繋がりをもちたい	6	2	2	0	0	0

- ・マイクロネシアの子と一緒にいて、良い影響をいっぱいもらった
- ・英語を独学で勉強中！
- ・来年もぜひ参加したい
- ・もっと英語の勉強をして、話せるようになりたいと思った
- ・言葉が通じなくても、ジェスチャーと翻訳アプリを使って通じ合えてうれしかった
- ・最初は話すことができるか心配だったけど、仲良くなれて日本の友達のように感じた
- ・別れるとき、とても寂しかった
- ・マイクロネシアに行きたい気持ちが強くなった

(3) 大田市立第三中学校の生徒の声

- ・言葉が伝わらなくてコミュニケーションをとるのが難しかったが、ふれあっていくうちに普通に話しかけることができるようになりとても楽しい時間を過ごした
- ・私は英語が嫌いで、あまり勉強していなかったが、今回の交流をきっかけに英語を話すことが楽しくなった
- ・他国の文化を知ることができた

5 成果と課題

《成 果》

- ・ホストファミリー募集について、当初大田市内の小学5年生から中学2年生のみを対象に募集をかけていたが、4月に発生した地震の影響等もあり、希望者が少なかった。そこで、大田市内の制限をなくし、過去の交流の家の事業の参加者に声をかけることによって、より多くのホストファミリーの申込を得ることができた。
- ・参加者の怪我による病院対応等があったが、スケジュールに余裕を持たせたおかげで、大きな混乱なく事業を実施することができた。
- ・大田市立第三中学校での活動では、窯芸活動を学校プログラムで取り入れた。作品については9月に陶器を焼き、その後それぞれへ英語で書いた手紙もつけてマイクロネシアの子供たちに贈った。一時的な繋がりだけでなく、作品を通じてお互いの繋がりを事業実施後も実感することができた。
- ・ホストファミリーの中には、メールアドレス等を交換した方や、事後学習「お手紙を書こう」に参加し、手紙を書くなどして、さらに交流を深めている。また、ホストファミリーの保護者から、「子供たちから『英語が喋れるようになりたい』とか、『来年もホームステイに来てもらいたい』と言っている。そして、私も、いつかポンペイに行くために英会話を勉強したい。」という声や、「わが子にとって、外国の人という壁が少しでも薄くなったと感じている。」等のお言葉をいただいた。参加者アンケートの結果も含め、日本とマイクロネシアの子供たちの友情を育むことができた。

《課 題》

- ・全日程参加ができる看護師を確保することが出来なかったため、島根大学医学部附属病院に協力をしてもらい、1泊2日の交代制で看護師を派遣していただいた。しかし、交代制のため、看護師とミクロネシアの子供たちとの繋がりを作ることができなかったことから、次年度は、全日参加ができる看護師を確保できるよう、早い時期から募集をかけていきたい。
- ・ホストファミリー募集のチラシについて、情報が多く、必要なことが伝わりにくかった。次年度は、情報を精査して、シンプルな募集チラシにしたい。
- ・随行者については、自国への連絡等で、Wi-Fi設備が必要であったが、交流の家にはWi-Fi設備が整っていないため、連絡等を取ることができなかったとのこと。大田市では、4月に地震があったことから、有事の際の連絡体制について随行者が心配していたので、次年度はポケットWi-Fi等を受け入れ期間中、契約することを検討する必要がある。
- ・ミクロネシアの子供は、長時間のバス移動や長時間外を歩くことを普段はしていないとのこと。プログラムを運営する際、細かく休憩を設定するなどの配慮が必要である。

(担当：事業推進係 久城 秀太)